

日時：2024年7月22日(月)17:10～18:50

会場：駿河台キャンパス リバティータワー15階 1155教室

講師：イングビルト・リチャードセン ミュンヘン大学講師

テーマ：1900年頃のミュンヘンと東京の諸関係について

使用言語：ドイツ語(通訳なし)

今回講演をしていただいたイングビルト・リチャードセン博士(ミュンヘン大学/アウグスブルク大学講師)は、ドイツを中心にヨーロッパ諸国で活躍している気鋭のドイツ文学・ドイツ文化史研究者である。特に世紀末ミュンヘンにおける女性解放運動、ユーゲントシュティールを中心とした世紀末文化の研究者として国際的にも名高く、この分野におけるさまざまな著書・返書を刊行している。最近の主な著書・編著には、『女性の島、フラウエンキムゼーに忘れられた女流詩人の足跡を辿って』(2017、編著)、『『情熱の心、燃える魂。いかにして女性は世界を変えたか』(2019、単著)などがある。またこれ以外に様々な美術館・博物館での展示をいくつも企画、カタログを執筆し、テレビ番組の制作も手がけている。

さて、今回のテーマ「1900年頃のミュンヘンと東京の諸関係について」は、われわれ日本人にとってもなじみのある多くの人物が登場し、きわめて刺激的な内容であった。16世紀にイエズス会の宣教師が日本に渡来して以降、ミュンヘンと日本の関係は始まった。1623年には日本のキリスト教の殉教者についての戯曲がミュンヘンで上演されている。おそらくこれは豊臣秀吉によるキリスト禁止令が招いた悲劇であろうが、それが遠いヨーロッパまで知れ渡っていたことになる。

ミュンヘンとの交流が活発化するのには18世紀に入ってからである。1823年、長崎の出島にフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルトがやってきてオランダ商館医となるが、彼は一般に思われているようにオランダ人ではなくドイツ人であった。1830年にオランダを経てドイツに戻ったが、晩年はミュンヘンに暮らし、日本博物館を開いたりして日本文化の普及に努め、今も彼の墓はミュンヘン郊外にある。

1871年から2年間アメリカ、欧州の12カ国を訪問した岩倉具視の使節団もミュンヘンを訪れ、さまざまな印象を日記に書き留めている。そして1886年3月8日～1887年4月15日には森鷗外がミュンヘンに滞在し、ペッテンコーファーの下で医学の研究にいそしみながら、多くの文人、芸術家とも交わった。特に洋画家原田直次郎との交友は実り多く、彼をモデルにした小説「うたかたの記」が書かれたことは広く知られている。リチャード

セン博士はこうした交流の歴史をさまざまな写真や新資料で丁寧に背景を説明し、実際にその舞台になった場所を訪問した印象も話してくれるので、聞いていて飽きることがなかった。そして、まったく聞いたこともない日本人であるキタサト・タケシという人物が 19 世紀の末にミュンヘンに来て、日本の生活を活写した **Fumio** という戯曲を書き、大きな反響を呼んだという新事実はわれわれを驚かせた。

聴講者は明治大学の研究者を中心に、わずか 10 人ほどであった。残念である。学期末の試験期間中であることも災いしたのかもしれない。しかしきわめて示唆に富む刺激的な講演に対して、出席者から次から次へと質問が出た。質問のひとつひとつに対して博士が丁寧に答えてくださるので、予定した時間を大幅に超えることになった。そこで、懇親会に場を移してからもわれわれの議論は続いた。このような充実した中身の濃い講演は実に久しぶりであり、出席者は大変満足していたように思う。講演の実現に援助を惜しまなかった国際連携事務室にの皆さんに心から感謝申し上げると同時に、また近くこのような機会を持てればと望む次第である。

